

安全への提言

|||||



グローバルからローカルへ

み三 やけ宅 あつ淳 み†

2008年度のノーベル賞は、南部陽一郎先生、小林誠先生、益川敏英先生が物理学賞、下村脩先生が化学賞を受賞され、暗いニュースの多い昨今、明るい話題として大きく取り上げられた。先生方の受賞に心からお祝い申し上げるとともに、日本の研究者にも大きな刺激となり、自然科学研究を志す若き学徒に勇気と元気を与えていただくと喜ばしい限りである。ノーベル賞の設立を遺書に書き記したアルフレッド・ノーベルはスウェーデン出身の科学者であり、周知のとおりダイナマイトの発明で巨万の富を得たが、生涯で300を超える特許を取得した発想の人であった。遺書に記された「世界平和に貢献した人を顕彰するための賞」は、ノーベルの死後、設立されたノーベル財団により、1901年より始まった。1901年、第1回の受賞者は、物理学賞がレントゲン、化学賞がファントホッフ、生理学・医学賞がベーリングであることは有名である。

さて、米国に端を発した昨今の金融不安は、力づくで自然を制圧し、量的拡大と生産効率を盲目的に追求する物質文明の破綻を意味していることは明らかである。わが国においても明治以来、文明開化と称して西洋文明の真似事として欧米列強の文化に急速に追いつくことを是とした結果といえよう。しかし真似事はあくまでも真似事であり、自然発生的に創出された日本固有の文化に根差したものとはいえないところに、日本人のメンタリティと現代文明のミスマッチがあり、そこに一種の限界と閉塞感の一因があるように思う。

紀元前数世紀ごろ、北部九州に渡来した集団が日本列島に水稻農耕技術を広めたが、九州を出て本州に勢力を伸ばすまでに100年、京阪神に到着するのに300年を要したと聞いた。すでに武器や道具をもっていた数百万人の弥生人が、本州に居住して狩猟採集生活をしていた数万人の縄文人を駆逐することは難しいことではなかったが、日本の自然に順応するためにこれだけの長時間を要したといわれている。亜熱帯での農耕にたいしたノウハウは必要とせず、種をまき水を与えれば作物は自然に育ったが、多彩な四季をもつ日本の

風土に対応できる稲作を行うには品種改良や育成の時間ひま、すなわち高度な管理技術が必要であったため、食料の確保が可能となるまで居住域の拡大ができなかったとのことである。古来、日本人は自然を尊び自然に生かされてきた。生活のなかに八百万の神が住み、どこにでも自然神がいた。自然に順応し得た者のみが生を得るという自然の摂理に生かされてきたわけである。

折りしも昨年大河ドラマ「篤姫」では、倒幕、大政奉還により既存の価値観を破壊し、西洋文明の導入による近代化路線を創造として、時代に翻弄されて渦中に生きる人々を女性の立場から象徴的に描き、視聴者の支持を得たようだ。破壊と創造、いわゆるスクラップアンドビルドはいつの時代にも前進のために必要と考えられるが、歴史の必然と考えられる倒幕も、変えるべきものと変えてはいけなものの判断が容易ではないことを示しており、その評価は歴史の検証を待たねばならない。

2008年のノーベル賞は、対称性の破れによるクォーク世代の予言やクラゲから抽出した緑色蛍光物質などの功績に与えられたが、人類にはまだまだ解明できない事柄が多い。自然界の不思議や真理を探究することとともに、グローバルスタンダードから多様性を認めるローカル視点への転換を図り、それぞれの時代、場所、社会における約束事（法規制、倫理など）とのバランスを保ちながら、自然とうまく折り合いをつけて人類の永続を図るためにわれわれができること、なすべきことを科学技術推進の新たな軸として研究開発を進めるべきであるが、その際に、自然を尊び感謝する日本人の精神性や感性を再認識し、日本古来の自然とともに生きる文化的背景を基盤とし、「世界の日本化」によって新たな時代のパラダイムを提示し、日本型安全工学の確立と推進、発信を図ることが、人類の持続的発展(sustainability)につながるのではと考える次第である。

† 横浜国立大学 大学院 環境情報研究院：〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-7